

10. Webコンテンツに対する評価的認識に関する調査

芝崎 順司
近藤 智嗣

1. はじめに

Web情報に対するリテラシーとして、インターネット上で流布されている情報の特性上、情報を弁別し、批判的に評価して利用するリテラシーが非常に重要な要素となる。

芝崎（1999）は、インターネット上の情報の量や質について検討した上で、これまでに北米でいくつか開発されているインターネット上のサイトや情報を評価するチェックリスト（例えば、Patriciら（1999）は、リソースベースの問題解決型学習をする際のチェックリストとして、範囲処理、典拠、関与、時間軸の5つのカテゴリーを設定している。また、Janら（1998）は、典拠、正確さ、目的、新しさ、範囲の5つのカテゴリーを設定している。さらにRandallら（1997）は、目的と読者、典拠、範囲、形式、信頼性の5つのカテゴリーを設定している）の内容を検討し、新たに、Web情報を批判的に評価するためのチェックリストを作成した。

そのチェックリストは、目的、範囲、内容、典拠、適時性の5つのカテゴリーにわかれているが、その後の検討の結果、内容のカテゴリーの項目をさらに2つにわけ、そのうちの情報倫理にかかわるような内容を独立させ、新たに適正というカテゴリーを設け、全部で6カテゴリーを設定した。

本研究では、このチェックリストを基に、Web情報に対して、教員はどのようなことについて意識して接しているか、さらに、生徒に対して、どのようなことについて意識して指導しているかについての実態を把握し、その課題を明らかにするために、中学校・高等学校の教員を対象に、インターネットを利用して、アンケート調査を行った。

本稿は、そのうちの高等学校の教員を対象にしたアンケートの結果をまとめたものである。

2. 手続き

2.1 対象

インターネットに公開されている高等学校のサイト中で、担当者の電子メールアドレスが記載されているページを探し、アンケートの依頼を電子メールで送付した。公開されている中学校のサイトはヤフーの教育・小中高校・高等学校・都道府県別一覧のカテゴリのリンク集 (http://dir.yahoo.co.jp/Education/K_12/High_Schools/Regional/) を利用した。

その結果、1230の電子メールアドレスにアンケートを依頼し、180名の有効回答があった。

2.2 方法

アンケートはHTMLのフォーム機能を利用し、Webページ上で記述すると、電子メールとして回答が返信されてくるようにした。

2.3 内容

アンケート項目は、まず、インターネット経験や利用方法、有害情報への対応等を質問し、次に、(1)教師が授業で情報を閲覧（以下、教師・閲覧）、(2)教師が授業で情報を発信（教師・発信）、(3)情報を閲覧するよう生徒に指導（生徒・閲覧）、(4)情報を発信するよう生徒に指導（生徒発信）、の4つの場合に、それぞれ以下の31項目について意識しているかどうかを質問した。これらの項目は前述の6つのカテゴリーのチェックリストに対応する項目を、ランダムに並び替えたものである。

3. 結果

3.1 WWW利用方法（（ ）内は件数、複数回答）

教師の授業における利用は、WWW閲覧（161）、WWWによる情報発信（93）、生徒の授業における利用は、WWW閲覧（142）、WWWによる情報発信（56）となっている。

図1・図2によると、回答者（教師）の90%弱が、Web閲覧を授業で利用しており、約6割がE-mailも利用している。また、WWWによる情報発信は5割を越えている。生徒がWWW閲覧を授業で利用している率も8割弱、E-mailが4割強、WWWによる情報発信が3割強となっている。特に、情報発信の面において、教師の利用にくらべ、生徒に利用させている件数が少ないのが現状である。

図1 インターネット利用（教師）

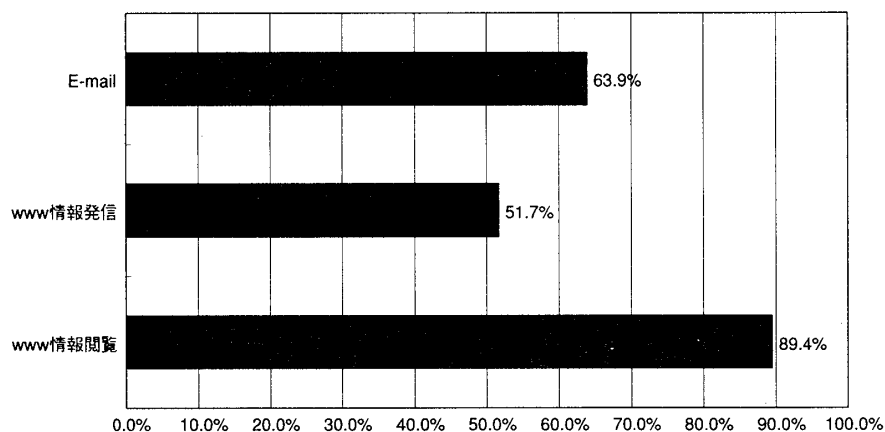
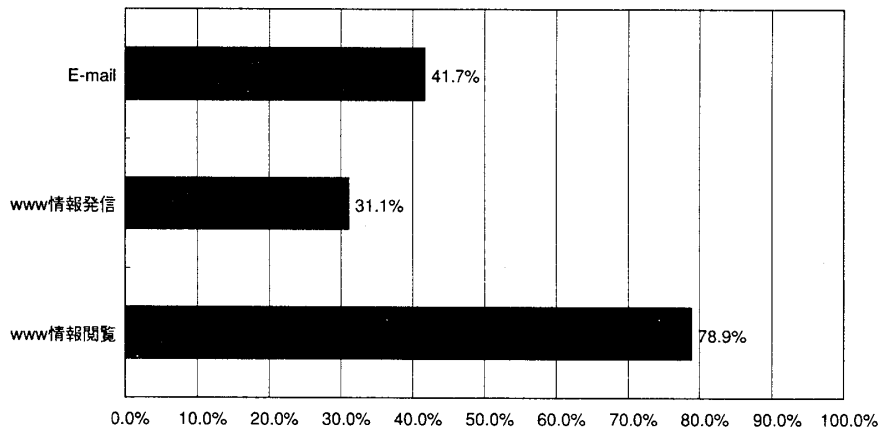


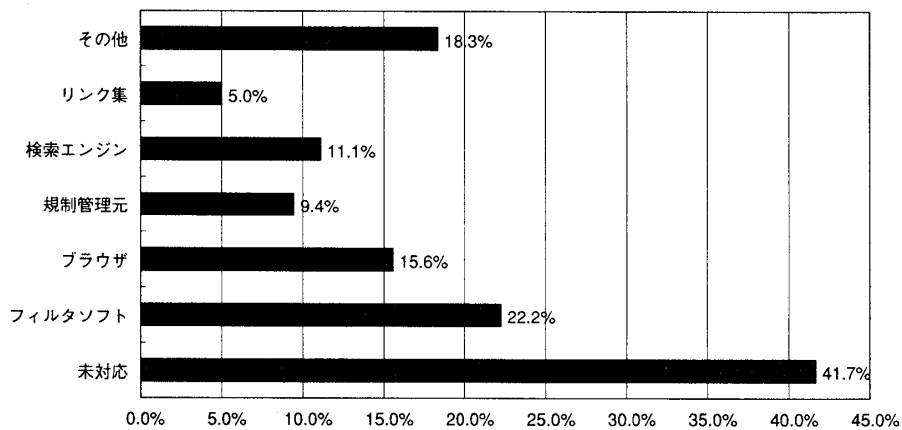
図2 インターネット利用（生徒）



3.2 有害情報対策（（ ）内は件数、複数回答）

図3によると、WWW上の有害情報への対応は、未対応（74）、フィルタソフト利用（40）、ブラウザの規制設定（28）、規制管理元を利用（17）、信頼ある検索エンジン利用（20）、信頼あるリンク集利用（9）となっている。有害情報に対して、約4割が未対応であり、3割弱がフィルタソフトを利用している。その他としてあげられた対応は、生徒の利用時に必ず教師が立ち会うなどの人的対応である。

図3 有害情報への対応



3.2 Webページを活用する際の意識

アンケートの中で、ランダムに並べられた項目を、予め設定されたカテゴリー別に並びかえ、各項目について、教師がWWW閲覧をする際に意識していると答えた回答数、教師がWWWによる情報発信をしていると答えた回答数、生徒にWWW閲覧をさせる際に意識して指導していると答えた回答数、生徒にWWWによる情報発信をさせる際に意識して指導していると答えた回答の実数を示す。

全体として、31項目中、「教師・閲覧」では平均8.9、「教師・発信」では8.1、「生徒・閲覧」では5.5、「生徒・発信」では、4.5の項目について、意識したり、意識して指導していることが明らかになった。従って、「教師・閲覧」、「教師・発信」、「生徒・閲覧」、「生徒・発信」の順で、意識している項目が多いといえる（なお、あらかじめ、3.1で実際に利用していると答えなかった回答者の回答は有効回答から除外している）。

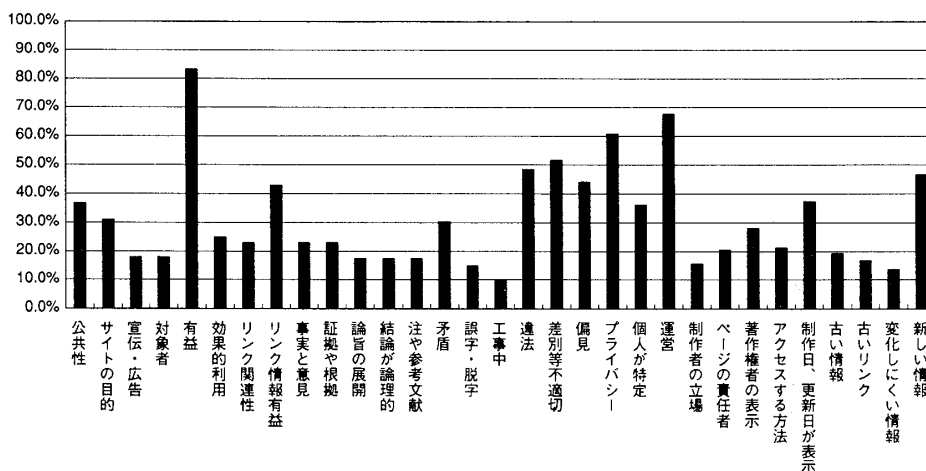
表1 Web情報に対する評価リストと評価的意識

チェックリスト項目	教師閲覧	教師発信	生徒閲覧	生徒発信
	161	93	142	56
1 目的(4)				
公共性のある情報か。	59	45	33	19
サイトの目的が明確か。	50	45	22	25
宣伝・広告は含まれていないか、 含む場合は他の情報との区別がされているか。	29	29	15	16
Webページの対象者がわかるようになっているか。	91	53	15	16
2 範囲(4)				
役に立つ有益な新しい情報か。	134	45	103	24
内容を明確にするために、タイトル、見出し、目次、画像等が 効果的に使われているか。	40	60	20	34
リンク先との関連性が適切か。	37	45	23	24
リンク先の情報が有益か。	69	42	46	21
3 内容(8)				
事実と意見が区別されているか。	37	27	25	17
証拠や根拠が表示されているか。	37	30	21	16
論旨の展開に矛盾はないか。	28	34	12	18
結論が論理的でわかりやすいか。	28	24	15	16
注や参考文献による裏付けがあるか。	28	29	16	17
他の情報源の情報や先行知識との矛盾がないか。	49	27	27	16
文法上の誤りや誤字・脱字がないか。	24	63	20	37
工事中の情報が含まれていないか。	16	31	8	14
4 適正(5)				
違法な内容が含まれていないか。	78	65	53	45
差別等不適切な表現は使用されていないか。	83	80	59	56
様々な偏見が含まれていないか。	71	63	40	40
プライバシーを侵害するような情報が含まれていないか。	98	88	78	56
児童・生徒の氏名や写真等、個人が特定できる情報が含まれていないか。	58	93	40	56
5 典拠(5)				
Webページを運営している団体や個人は誰か (サイト管理者や、URL等による推測)。	109	47	64	26
制作者の立場(専門、所属、地位等)が表示されているか。	25	28	11	17
Webページの責任者が表示されているか。	33	45	14	22
著作権者が表示されているか。	45	45	28	29
制作者にアクセスする方法が表示されているか。	34	45	20	27
6 適時性(5)				
情報の制作日、更新日が表示されているか。	60	54	23	24
既に変ってしまった古い情報が残されていないか。	31	53	16	20
情報の古いリンクが残されていないか。	27	47	18	19
変化しにくい情報と最新性が求められる情報が区別されているか。	22	30	13	3
新しい情報か	75	48	41	22

3.2.1 教師がWWW閲覧をする際に意識している項目の傾向

図4によると、教師がWWW閲覧をする際に意識している項目の傾向をみていくと、「有益な情報」であることや、「差別等不適切な表現の使用」、「プライバシーの侵害」や「サイトの運営者」については、半数以上の有効回答者が意識していると回答したが、反対に、「宣伝・広告」、「情報の対象者」、「論旨の展開」、「結論の論理性」、「注や参考文献」、「文法上の誤りや誤字・脱字」、「工事中の情報」、「制作者の立場の表示」、「古い情報」、「古いリンク」、「変化しにくい情報」と新しい情報の区別については、意識している有効回答者数は20%以下であった。

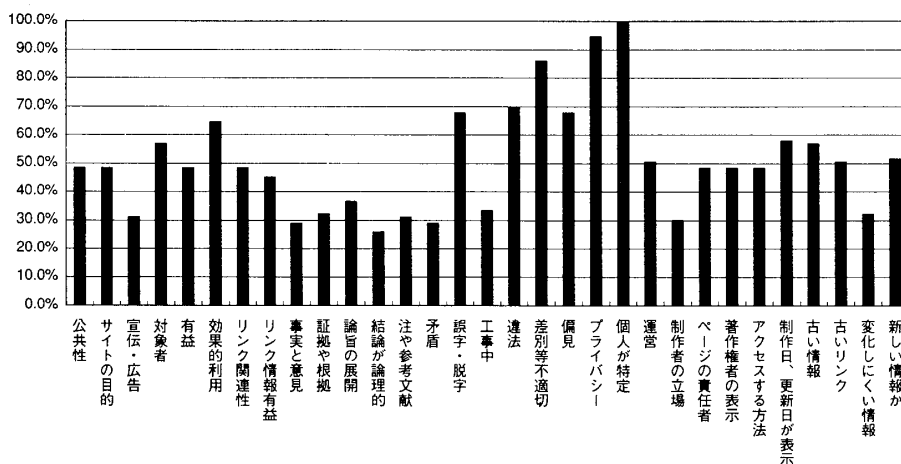
図4 教師による情報閲覧



3.2.2 教師がWWWによる情報発信をする際に意識している項目の傾向

図5によると、教師がWWWによる情報発信をする際に意識している項目の傾向をみていくと、25%以下の項目はなく、特に、「差別等不適切な表現の使用」や「プライバシーの侵害」、「個人が特定化される情報」については、80%以上の有効回答者が意識していると回答している。また、「教師によるWWW閲覧」と比べて、ほとんどの項目で、意識している割合が高いことが明らかになった。

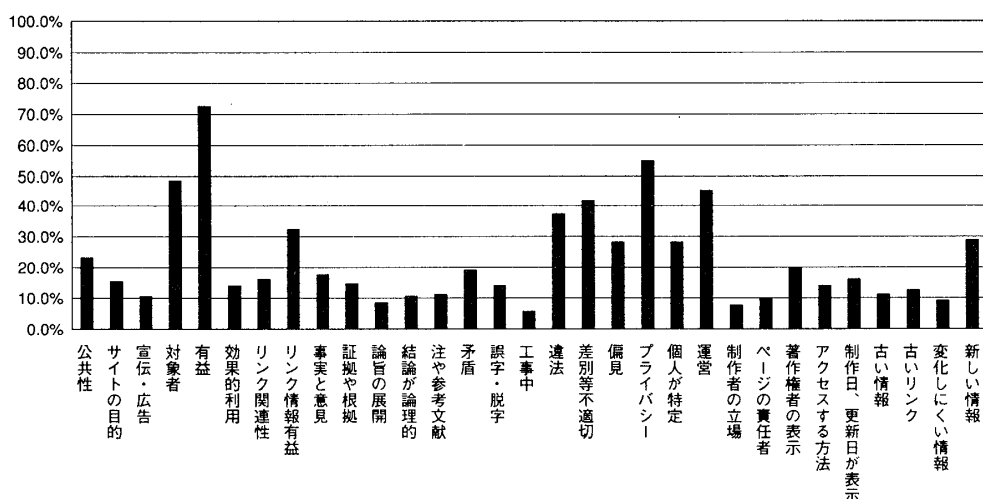
図5 教師による情報発信



3.2.3 生徒にWWW閲覧をさせる際に意識して指導している項目の傾向

図6によると生徒にWWW閲覧をさせる際に意識して指導している項目の傾向をみていくと、「有益な情報」であることと、「プライバシーの侵害」については、半数以上の有効回答者が意識していると回答したが、反対に、「サイトの目的」、「宣伝・広告」、「効果的利用」、「リンク関連性」、「事実と意見」、「証拠や根拠」、「論旨の展開」、「結論の論理性」、「注や参考文献」、「他の情報源や先行知識との矛盾」、「誤字・脱字」、「工事中の情報」、「制作者の立場の表示」、「WWWページの責任者の表示」、「制作者へのアクセスの方法の表示」、「古い情報」、「古いリンク」、「変化しにくい情報と新しい情報の区別」については、意識している有効回答者数は、20%以下であった。

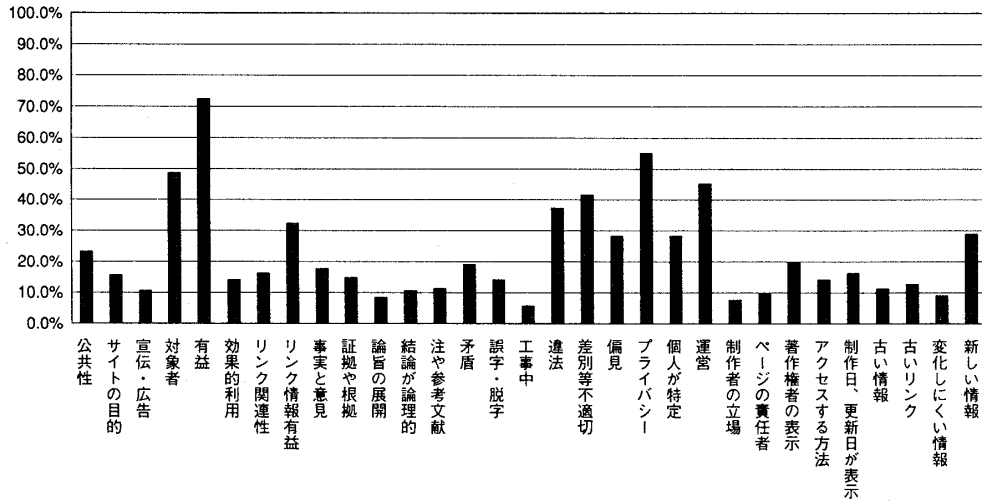
図6 生徒による情報閲覧



3.2.4 生徒にWWWによる情報発信をさせる際に意識して指導している項目の傾向

図7によると生徒にWWWによる情報発信をさせる際に意識して指導している項目の傾向をみていくと、「差別等不適切な表現の使用」、「プライバシーの侵害」、「個人が特定化される情報」については、90%以上の有効回答者が意識していると回答している。反対に、「工事中の情報」、「変化しにくい情報と新しい情報の区別」については、意識している有効回答者数は、25%以下であった。しかしながら、「生徒によるWWW閲覧」と比べて、ほとんどの項目で、意識している割合が高いことが明らかになった。

図8 生徒による情報発信

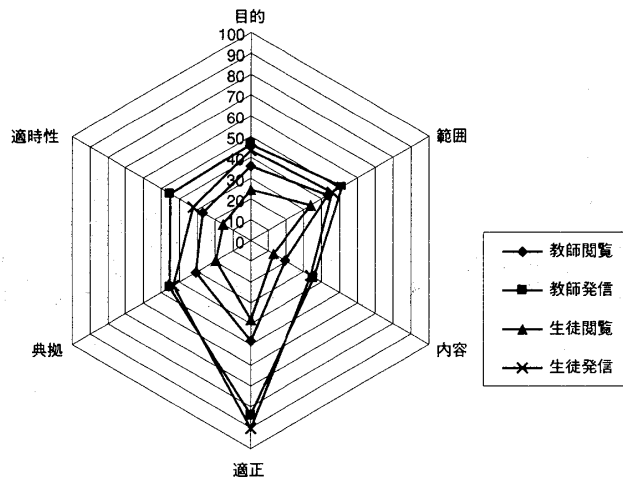


3.2.5 各カテゴリー別の傾向

目的、範囲、内容、適正、典拠、鮮度という6つの各カテゴリーに分類された項目に対して意識している有効回答者数の平均を%であらわしたのが図8である。図8から次のような傾向が明らかになった。

- ・教師、生徒とも全てのカテゴリーで、「発信」のほうが「閲覧」より、意識している率が高い。
- ・「教師閲覧」と「生徒閲覧」では、「教師閲覧」のほうが全てのカテゴリーで意識されている率がやや高い。
- ・「教師発信」と「生徒発信」では、「適正」を除いた他のカテゴリーでは、「教師発信」のほうが意識されている率が高い。特に「適時性」で違いがみられる。
- ・「教師閲覧」では、全てのカテゴリーで50%を下回っているが、相対的には、「範囲」、「適正」がやや意識されている率が高く、「内容」が意識されている率が低い。
- ・「教師発信」では、「内容」、「適正」を除いて、他のカテゴリーはほぼ50%前後である。「適正」が意識されている率が高く、「内容」が意識されている率が低い。
- ・「生徒閲覧」では、「教師閲覧」と同じく、全てのカテゴリーで50%を下回っているが、相対的には、「適正」、「範囲」がやや高く意識され、「内容」、「典拠」、「適時性」が意識されている率が低い。
- ・「生徒発信」では、「内容」、「適正」、「適時性」を除いて、他のカテゴリーはほぼ50%前後である。「適正」が意識されている率が高く、「内容」および「適時性」が意識されている率が低い。

図8 各カテゴリー別の傾向



4. 結論

上記の結果から、次のようなことがいえる。

- ・教師は、情報閲覧時より、情報発信時に、より強くWeb情報に対して意識したり、生徒に対して意識して指導したりしている。
- ・教師は、自ら情報発信する場合の方が、生徒に情報発信させる場合より、Web情報に対しての意識が高くなる。
- ・「適正」については全般的に意識が高い。
- ・「内容」については、どの活動時にも全般的に意識が低い。
- ・生徒が活動する時には、「適時性」についての意識が低い。

5. おわりに

本調査の回答者は、その学校のサイトで電子メールアドレスが公開されている担当者であり、また、ほとんどの回答者が、学校への導入時期より、自身のインターネット利用時期の方が早いことなどから、一般の教員よりは、意識している、また、意識して指導している項目が多いであろうと推測される。しかしながら、本調査では、「適正」の項目を除いて、意識はあまり高くないことが明らかになった。特に、「内容」の項目は、意識が低いことが明らかになった。「適正」に属するの項目は、インターネットの普及に伴い、近年、注目されている情報倫理に関する項目であり、インターネット特有の内容に対しては意識が高いことがわかる。反対に、「内容」に属する項目は、WWW情報に限られたものではなく、従来、文字情報に対するリテラシーとして国語の授業の中で扱われてきたような項目であり、活字メディアによる読み書きであれば、意識され、強調されるような項目に対しての、意識が低いことが明らかになった。

情報倫理は重要な問題であり、それに対する配慮は、WWWを利用した表現活動の前提となるものであるが、しかし、ただ情報を発信するだけでなく、その情報の読み手の存在を意識すれば、その情報の対する信頼性や妥当性を高めるような努力が必要であると思われる。さらに、情報閲覧時においても、現在、WWW上で流布されている情報の質を考慮すると、より一層、

情報の対する信頼性や妥当性を評価することが必要である。

このように、インターネットを調べ学習や表現のツールとして利用するためには、「適正」以外の項目に対しても、意識し、また、意識して指導する必要がある。そのためには、例えば、教員研修において、情報を評価する態度の育成を強調し、本チェックリストを利用するような具体的な方法論の提示をすることが重要である。

【参考文献】

1. Jan Alexander, Marsha Ann Tate (1998) Wolfram Memorial Library, Widener University
Web Page <http://www.science.widener.edu/~withers/inform.htm>
2. Patricia Iannuzzi Charles T. Mangrum II Stephen S. Strichart Allyn and Bacon (1999)
Teaching Information Literacy Skills, Allyn and Bacon, Needham Heights
3. Randall James Ryder, Tom Hughes (1997) Internet for Educators, Prentice Hall, Upper
Saddle River, New Jersey Columbus, Ohio
4. 芝崎順司 (1999) インターネットに対応した新しいリテラシーの構想、教育メディア研究
第5巻第2号 日本教育メディア学会、pp46-59
5. 芝崎順司・近藤智嗣 (2000) Web情報に対する中学校教員の批判的認識に関する調査、教
育メディア研究第7巻第1号 日本教育メディア学会、pp55-63